

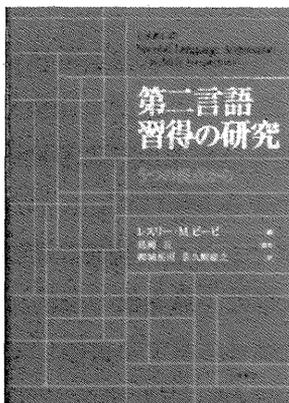


私の一冊

卯城 祐司

「第二言語習得の研究」

レスリー・M・ビービ著／卯城祐司，佐久間康之
訳（大修館書店 1998） [中央図：807-B32]



言語を習得する最善の方法とは何か？恐らく誰もが、目標言語に多く接すること、つまりは数多くのインプットを与えれば良いと考えるであろう。確かにこのことは一理ある。が、しかし、最善とは言えないことも確かである。現に日本の英語教育の現場では、数多くの歳月を費やして試行錯誤を繰り返しながら、めざましい成果をあげていないのが現状である。

本書は、一見かけ離れた分野を含む理論的な研究成果が、いかに実践に密接に関連しているのか、すなわち「理論と実践の統合」を強く説いている。原著は、5つの分野の第一人者がそれぞれ、「言語習得という複雑な宇宙」のメカニズムを巧

みに説き明かしており、国内外の大学院・学部等で必読とされている入門書かつ専門書である。

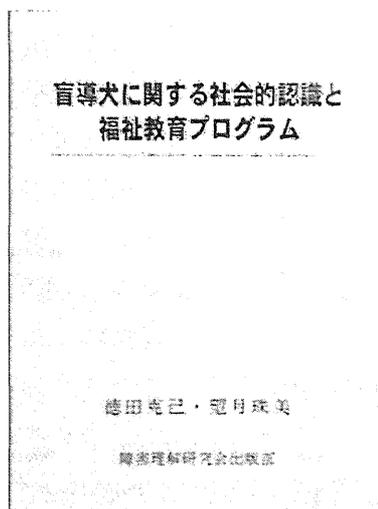
具体的には各章が、1) 心理言語学的視点, 2) 社会言語学的視点, 3) 神経言語学的視点, 4) 教室における研究の視点, 5) バイリンガル教育の視点, という5つの異なる専門領域から、第二言語習得研究の成果を吟味している。まとめの第6章では、走り高跳びの進歩を例にとり、理論と実践の関係が述べられている。水平速度、垂直方向へのエネルギーの変換、重心の移動や遠心力などの物理学の理論は、直接的には何ら示唆を与えないが、これらの洞察によって競技は着実に向上してきた。英語教育に置き換えるならば、跳躍者である学習者は、これらの理論を知る必要はない。しかしコーチである教師は、多角的な視点に基づき理論的な成果を咀嚼し、指導法の向上を目指さなければならないのである。

その時代その時代に流行した理論に単純に影響を受け、振り子のように右に左に大きく揺れ動いてきた日本の英語教育に、本書が多少なりともお役に立つことがあれば幸いである。

(うしろ・ゆうじ 現代語・現代文化学系助教授)

徳田 克己

「盲導犬に関する社会的認識と福祉教育プログラム」
徳田克己、望月珠美著（障害理解研究会出版部
1998） [中央図：369.27-To35]



最近では、幼稚園児でさえも盲導犬や車いす、白い杖、手話などの存在を知っている。このように、障害や福祉の情報が世の中に広く知られるようになったことは、「障害理解」を専門としている私たちからするとたいへん嬉しいことである。しかし正しい認識が広まるとともに、その副産物として、さまざまに色づけされた誤解も広がってしまう。

例えば、「盲導犬は信号の色を見分けることができる」、「盲導犬に行き先を告げるだけで、目の不自由な人をそこまで連れて行ってくれる」、「盲導犬は主人に危険が迫ると吠えて知らせる」と思っている人は多く、また「仕事中に盲導犬の頭をなでたり、エサをあげてはいけない」ことを知っている人は少ない。世の中の人を知っておいてくれないければ、盲導犬を使用している視覚障害者が危険な目にあうことさえある。

本書では、幼稚園児から成人までを対象とした盲導犬に関する社会的認識調査の結果を紹介し、学校教育において扱うことのできる盲導犬に関する福祉教育プログラムの例を示した。いくつかの小・中学校において、このプログラムが適用されたという報告を受けている。

盲導犬とその使用者に関する正しい認識が広まり、社会的な受け入れがさらに進むことを願っている。調査に協力して下さった盲女性の「盲導犬を得てから、以前に比べて気軽に町へ出かけることができるようになりました。でも、もっともっといろいろなところへ行ってみたいのです。」という言葉を忘れないで、啓発を続けていきたい。

(とくだ・かつみ 心身障害学系講師)